

特 253
598



始



特

598

和十七年六月
日本同盟會報

回教の話

大日本回教協會理事長 松島肇氏(述)

新日本同盟

特253
598

(昭和十七年六月)
(新日本同盟會報)

大日本回教協會理事長 松島肇氏(述)
回教の話

新日本同盟

回教の話

松島肇(述)

一 昨年の通常議會の時に宗教團體法案が政府から提出され、其の第一條の中に「神道教派、佛教宗派及基督教其ノ他ノ宗教」と書いて、世界三大宗教の一つである「回教」と云ふ名前を明示しなかつたので、私共は回教對策の見地からして、是非此の法文の中へ「回教」と云ふ字を入れて欲しいと云ふことを主張したのであります。當局は日本の宗教團體であるから、日本に於て相當の勢力のある宗教でなければ明示することは出来ない。成る程回教は世界の三大宗教の一つであるかも知れないが、日本に於ける回教徒と云ふものは千にも足りない、さう云ふ事態に於て宗教團體法の中に「回教」と云ふ文字を明示することは出来ないと云つて、到頭「回教」と云ふ文字を入れることに成功しな

つたのでありますが、唯世界に三億以上を數へる信徒を有して居る回教徒全體の日本の宗教團體法に對する思惑を考へまして、それならば適當の機會に於て政府が「回教」と云ふ文字を法律の中に明示しなかつたのは回教を輕んずる所以でないと云ふ意味のことを聲明して欲しいと云ふことを請求した結果、議會に於て最終の總會の時に總理大臣及文部大臣から其の趣旨のことを聲明されて、是で内地に於ける回教徒を満足せしめたやうな次第であります。

そこで今日となつて考へて見ますれば、大東亞戰爭の結果として、既にマレー半島が完全に日本の支配下に入り、政府も之を將來日本の領土とすると云ふ意向を示されて居るし、それから又今日に至る迄、東印度に就て將來どう云ふ風にするかと云ふことは政府はまだはつきり言つて居りませぬが、若し東印度迄が將來日本の領土となると云ふやうなことになると思はしますれば、日本に於ける回教徒の數と云ふものは五千萬人以上になる譯でありまして、曩に政府の宗教團體法案の審議される時に説明された理由は立たなくなると思ふのでありますから、此の際適當の機會に於て、宗教團體法に「回教」と云ふ文字を入れることが適當であると思はれるのであります。併し新領土に對して直ちに現在の宗教團體法が其の儘適用されるものとも思ひませぬから、内容を新領土に對して適用すると否とは

別問題として、少くとも宗教團體法の中に「回教」と云ふ文字を明かにする必要があるやうに考へるのであります。

そこで只今回教徒の數に觸れましたから、世界に於ける回教徒の分布に就て一應御説明を申上げたいと思ふのでありますが、先づ東の方から始めてフィリッピン、ミンダナオ島に六十萬人ばかりの回教徒が居ります。それから滿洲國に三百萬人、支那全體で二千萬乃至三千萬人、但し此の三千萬人の中、大多數は支那の西北に主に居を占めて居るのであります。それからマレー半島に二百五十萬人、東印度が總人口六千萬人と假定致しまして、其の九割の五千萬人餘が回教徒であります。それから西へ移つて印度に七千萬乃至八千萬人、アフガニスタンが一千萬人、イランが千二百萬か千五百萬人、イラクが四百萬人、トルコが千七百萬、アラビヤ、シリヤ等、あの邊一帶を加へて千五百萬人それからエチプトが千五百萬人、エチプトを除く北アフリカがはつきりは致しませぬが二千萬人位あるだらうと思ひます。其の他のアフリカ全部で同じく二千萬人位、それから中央アジアのソヴィエトロシア領の二千萬人、ヨーロッパへ渡つてバルカン方面が、是は主としてセルビヤ及アルバニヤに多いのですが、あの地方全部を集めて二百萬人位居るだらうと思ひます。其の他世界に擴がつて居る

總ての回教徒を加へますと、全部で三億以上になるのであります。回教徒の多く住つて居る地方の人口統計がはつきり致しませぬから、或る者は世界全體で二億五千萬と云ひ、多く見る者は四億と云つて居りますが、大體其の中間を取つて三億位と見るのが適當であるかと思ひます。それで日本では支那で用ゐられて居る回教とか回々教と云ふ言葉を使つて居りますが、回教徒自身の本當の名稱は、回教としてははイスラムと云ふのが本當であります。イスラムと云ふ言葉は動詞から出た名詞でありまして、日本語で言へば神に歸依すると云ふ意味の言葉の動詞から出た名詞であります。それから回教徒のことをムスリンと云ひますが、此のムスリンと云ふのは神に歸依する者と云ふ意味で、今のイスラムから出た言葉の變形でありまして、神に歸依する者、それがムスリン、斯うなるのであります。何故支那で之を回教と言ひ出したかと言ひますれば、初めて支那に回教が傳へられた當時、支那の西の方の新疆省邊に回教と云ふ民族が居りますが、其の民族が回教を其の地方へ傳へたので回教の信する宗教と云ふ所から回教若しくは回々教となつたと謂はれて居りますが、支那に於ける回教徒自身は、今の宗教其のものは回教と言はずして寧ろ清真教と云ひ、其の寺は之を清真寺と云ふのが支那の回教徒の習はしであります。日本では支那の文献から取つた回教若しくは回々教と云ふ字

を採用して居るのであります。實際は是は餘り宜い名稱ではなくて、彼等回教徒が自分で言つて居るが如く、イスラム教と云つた方が宜いやうに思ふのであります。それから回教又はマホメット教と云ひますが、是は教祖のマホメットの名を取つたものでありまして、是は回教徒自身は避けて居ります。それは何故かと云ふと、回教徒の側から言ひますれば、彼の宗教と云ふものは何もマホメットが初めて教へ出したものではなくて、昔よりある神の教へをマホメットが唯天啓に依つて之を一般に傳へたに過ぎない、だからマホメットの教へでなくて神の教へである、唯マホメットが神から啓示を受けただけであると云ふ意味に於てマホメット教と云ふことを避けて居ります。それから回教に於ける聖典をコーランと云ひますが、コーランと云ふのは誦むものとも翻譯しますか、或は誦するものと云ふやうな意味でありまして、其の結果と致しまして回教徒の間に於ては、意味が分つても分らなくても、兎に角あのコーランを讀誦する、字が讀めなくても兎に角暗記をして之を口に唱へると云ふことが彼等の間の習慣となつて居り、従つて之を口に唱へる場合に於て一種の節を付けて讀むのが習はしとなり、又それを専門にする者が出來て居る位に彼等はコーランを讀誦すると云ふことに力を盡して居るやうな次第であります。それで此の際序に申上げて置きますが、コーラン其のものの文章

は非常な名文であるさうであります。目に一丁字なき、又學問もないマホメツトがあれだけの名文を口にすることを得たと云ふのは、是はどうしても何か神のお告げと云ふやうなものを頭の中に入れて居つたのでなくては到底凡人の筆にし若しくは口にすることの出来ないやうな名文である、斯う謂はれて居るのであります、由來キリスト教のバイブルに致しましても翻譯はなか／＼むづかしいと謂はれて居りますが、殊にコーランは翻譯がむづかしいさうでありまして、日本語の譯の如きは、今迄出來て居るものは二三種類ありますが、恐らくコーランの本當の名文を傳へることは出来ないだらうと思ふのであります、外の外國語に於ても、譯は到底原文に及ばないと云ふことであります。

そこでそればかりでなく、外にもコーラン其のものがマホメツトが神からのお告げを傳へたものであると云ふ意味の證據と致しまして、色々のことを舉げて居りますが、其の中で一番面白いのは、すつと後世になつて天文學が非常に發達した時代に於て初めて分つたことであります、日本で申しますると犬の星とか、或は狼の星と譯すのでありますが、此の星のことがコーランの中に出て居ります、其の當時無學なマホメツトとして此の星のことを言つて居るのは、どうしても是は神のお告げに依るにあらざれば、さう云ふことは言へないのである。それで此の犬星は太陽にも數倍する大

きさを持つて居る星であつて、太陽系よりもすつと大きな一つの星の系統の中心たる星であるさうであります、それがコーランの中にはつきり出て居る。又回教の方で食物の上に非常に忌み嫌ひがあるのであります、其の中で豚が絶対に禁止されて居ります。それで衛生思想の發達して居ないあの時代に於て何故豚を禁止したかと、斯う云ふ點を考へて見ますと、或る方面の説明を與へる者は、豚は見た所如何にも汚いからそれで嫌つたのだと云ふ説明を與へる人もあれば、又マホメツト自身は豚を食べて中毒したことがあつた、それで豚を禁止したのだ、斯う云ふ説明をする者がある。併し學理的に説明する人は、あの時から豚を下手に食べると、所謂豚の持つて居る條蟲であるとか何とか云ふやうなもの爲に人が冒される、それをマホメツト自身は無論醫學上さう云ふことを知つて居る筈がないので、之を禁止したのは同じく是れ神のお告げに依つて彼が禁止したものであるに違ひない。それから又マホメツトは酒及阿片の類を禁止して居りますが、是も彼自身が醫學上斯う云ふことが體の爲に悪いと云ふことを知つたのではなくて、矢張り神のお告げに依つて、斯う云ふものは人間の爲に悪いぞと云ふことを知り得ての結果であるだらうと云ふやうに、斯う云ふ色々のことは神のお告げに依るにあらざれば、マホメツトは斯う云ふことを言はなかつたであらうと云ふ證據として説

明材料に擧げられて居るのであります。是はマホメットを偉い者にする意味に於ての説明かとも思はれますが、他の一方に於て或は何か神よりの暗示を得たものであるかとも思はれるやうな氣が致します。御参考迄に附け加へて置きます。

マホメットの生れたのは西暦五百七十年でありまして、彼は生れて間もなく父を失ひ、それから暫くして母も亦失つて叔父の所に養育されたのであります。勿論教育を受けるでなく唯叔父の商賣の手助けをして居つたに過ぎないのであります。二十五歳の時に或る後家で盛んに商賣をやつて居る女の所へ婿に入りました。さうして其の家の商賣をやつて居る時にシリヤ方面へ行つたり來たりして、其の間にキリスト教若しくはユダヤ教の感化を相當受けたと言はれて居ります。當時アラビヤ、殊にマホメットの居つたメツカ地方は、所謂特權階級の横暴若しくは富んだ商賣人の卑劣な行爲等に依つて、社會は道德的に非常に腐敗して居つたのであります。大衆は非常な貧困の生活を憫んで居り、又奴隸制度と云ふものも随分慘たらしい境遇に多數の者を置くに云ふやうな状態であつたので、彼は之に餘程苦痛を感じたと見えまして、或る時に自分の商賣を捨て、山へ入つて默想に更けるやうになつたのであります。さうして西暦六百十年の時に神よりの啓示を受けたと云つて、彼は茲に初め

て回教を唱へ出したのであります。併し其の當時の偶像教に凝り固まつて居るアラビヤ民族は彼に耳を藉せる者は殆どなく、三四年掛つて僅かに數十名の信徒を得たに過ぎなかつたのであります。而も尙迫害に堪へ切れずして、最後にメツカへ、平たく申しますれば逃げ出すの已むなきに至つたのであります。是が西暦六百二十二年、之を「ヘゼラ」と言ひまして、此の「ヘゼラ」と云ふのは、譯をしますれば聖遷の年となつて居りまして、回教の是が紀元であります。

それで回教の紀元の所へ來ましたから回教曆のことをちよつと御話致しますが、回教の曆は無論太陽曆でもなく、又日本で言ふ陰曆でもありません。三十日の月と二十九日の月とが交互にあります。一年の日数が合計三百五十四日、ですから太陽曆と一年に約十一日の差がある譯でございます。従つて三十三年毎に回教曆の方が一年宛殖えて行くことになるのであります。そこで回教の紀元が西暦六百二十二年と致しますると、我々の曆に従へば今年は千三百二十二年になる筈であります。只今申上げたやうに約三十三年毎に一年を増すのでありますから、今年は千三百六十年になつて居ります。近い中に千三百六十一年に入ることとなるのであります。そこで今の回教曆に於きましては、春夏秋冬と月とが全然合はなくなつて來るので、冬が寒い時もあれば、又非常に暑い時もある

と云ふやうなことになるのでありまして、誠に都合が悪いと思ひますが、回教徒は依然として此の舊式な曆を守つて變へようとはしないのであります。

それで、マホメットは今のメツカを逃げ出してメチナへ行つて、そこで追々に信徒を得まして、茲に勢ひを得て自分の生れた土地のメツカを攻略し、それからだん／＼信徒の増すと同時に、勢ひを得て東西に自分の教へを廣めたのであります。それが大體六百二十二年から約十年で相當の廣い範圍に自分の教へを廣めることが出来たが、是れから愈々ダマスクスの方面に向つて進軍しようとするに當つて病を得て亡くなつたのでありまして、六百年に自分が回教を唱へ出してから、二十年餘には彼は亡くなつてしまつたのであります。併しながら彼の後を繼いだ四代のカリフの時代に回教は益々廣まりました。結局百年の間に東はインドのインダス地方より、西はアフリカの北岸全部に迄回教と云ふものが廣まるやうになつたのであります。何故回教が此のやうに短かい期間に非常な勢を以て廣まつたかと云ふことに就ては色々の説明が與へられますが、要するに回教其のものは單に宗教其のものばかりと云ふことが出来ず、平たく申しますれば祭政一致、宗教と政治とが合致した一つの宗教であると云ふことに歸することが出来ると思ふのであります。マホメットの現はれた當時に於け

るアラビヤの政治組織と致しましては、各種族が各地に分立して居りまして互に相争ひ、統一と云ふものが全然缺けて居つたのであります。マホメットの唱へ出した宗教は、單に宗教ばかりでなく是が政治にも關係し、又法律にも關係し、經濟にも關係する。さうして他の一方に於て同じ宗教を信する者は總て是れ同胞であると云ふ見地からして、回教に歸依した者は同時に社會的に一つの團體を形作つて、其の間に政治組織と云ふものが確立したのであります。でありますから、一方に於て宗教を宣布すると同時に、他の一方に於て政治的に今迄分立して居つた總ての種族を統一すると云ふ力を持つて居つたのであります。それからもう一つは、回教に於ては同じ宗教を信する以上は階級の區別がない、如何なる者も平等であると云ふ觀念から致しまして、今迄虐げられて居つた下層民も喜んで之に歸依すると云ふ状態になつたのでありまして、従つて回教の擴つて行く勢は非常なものであつたらうと思ふのであります。斯う云ふ關係で他の宗教と違つて、非常に僅かの中に回教が廣まつたと云ふことが出来ると思ふのであります。それで是は回教の悪口として解釋する人もありますが、回教は所謂右にコーランを携へ、左に劍を持つて進んだものだと思ふことを言つて居りますが、是はキリスト教徒が回教の悪口を言ふ時の言葉である、斯う云ふことを謂はれて居りますが、他の一方に

於て考へますれば、マホメットは常に斯う言つて居つたのであります。「我々の宗教に反抗する者は何處迄も之を打倒せ」と云ふことを言つて居るのであります。自分達の宗教に反抗する者があれば徹底的にやつつけるぞと云ふことを唱へて居り、又信徒は其の通りに考へて、苟くも回教に反抗する者があれば劍を持つて之に向つて行く、而も回教の教へと致しましては、我々の運命は豫め神に依つて定められて居るものである、戦に行つて死ぬことも、病に罹つて死ぬことも、是は神の定める所であつて、我々の如何ともすることの出来ないものである。而も自分の宗教を防衛する爲に戰場に於て死ぬと云ふことは、即ち神に歸一する所以である、來世に於て必ずや非常な幸福を得るであらうと云ふ風に教へて居るので、回教徒が侵略と申して宜いかどうか知りませぬが、發展して行く途上に於て之に反抗する者のある時に、彼等回教徒が勇敢に戦ふことが出来た。是が即ち回教が非常な勢を以て廣まる上に非常な助けをした一つの事項であると思ふのであります。

只今申上げた通りに、回教其のものは單に宗教ばかりでなく、社會萬般のことが之に定められて居るのであります。日本で民法に關係するやうなこともすつかりそこの中に出て居ります。さうして其の中で世間から最も非難を受ける點は婚姻の問題でありますが、コーランには明かに妻を四人迄

は持つても宜いと云ふことが書いてあります。是が社會的に見て一番非難される一つの點であります。是は強ちマホメットを責める材料にするのは、其の當時の社會狀態を考へて見ますと、是は少し酷に過ぎると思はれる點があるのであります。あの當時のアラビヤに於きましては、結婚と云ふことは非常な亂雜なものであつて、金さへあれば妻の如きは何人持たうと、何十人持たうと、そんなことは構はなかつたのであります。それを或る程度迄抑へると云ふ意味で四人迄は持つても宜い、而も四人持つ以上は、其の四人に對して物質的に又精神的に同じ待遇を與へると云ふことが書いてあるのであります。一人以上の女を精神的に又物質的に満足させると云ふことは出来ない相談で、結局或る意味に於ては一人以上持つと云ふことは止めると云ふ意味にも、あの當時の社會情勢から考へれば見られるのであります。それからあの當時に於ては女と云ふ者は全然財産相続の權利を持つて居なかつたのであります。非常な反對を押し切つて、マホメットは女にも相當の財産を相続する權利を認めさせるやうにしたのであります。此の相続の方法は非常な込み入つたもので、私もちよつと雜誌に書いたことがあります。兎も空で説明は出来ませぬが、兎に角今迄は男系の長子のみが全財産を相続して、他の如何なる者にも財産を分け與へないと云ふ制度であつて、それが社會的に

非常な害悪を流して居つた事情に鑑みまして、新しく女にも相續權を認めると云ふことにしたのがマホメットの一つの英斷であらうと私は考へるのであります。奴隸に就きましても、マホメット自身が範を垂れまして、或る一人の奴隸を自分の養子にして之れを自由のものとし、或は奴隸解放の道を拓き、又奴隸にも相當の社會的地位を認めしめると云ふ風に、社會的の改良にも相當の貢獻をマホメットは致して居るのであります。それやはやの點から考へまして、あの時代のアラビヤに於ける社會情勢を考へますと、マホメットのアラビヤ人種族に與へた恩惠と云ふものは非常なものであると云ふことが出来ると思ふのであります。

回教の教義に就て簡單に申し上げますれば、信仰箇條が約六箇條あります。其の第一は唯一の神、即ちアラを信すると云ふこと、是は天示を信すると云ふこと、それからコーランを信すると云ふこと、豫言者を信すると云ふこと、死後に於ける復活及審判を信すると云ふこと、宿命を信すると云ふこと、此の六つの信仰箇條が主たるものであります。其の中で豫言者を信すると云ふ點に就て申し上げますれば、豫言者は何もマホメット一人に限つたことではない、マホメット以前に非常に澤山の豫言者があつた、其の中六人、詰り「アダム」と「ノア」、「アブラハム」、「モーゼ」、「キリスト」、「マホメツ

ト」自身、此の六人が最も偉大なる豫言者であつて、而もマホメットが最後の豫言者である、斯う云つて居るのであります。回教の中にはバイブルの中から取つたと思はれるやうな點もあれば、又ユダヤ教から取つたやうな點もあれば、或る場合には佛教から取つたかと思はれるやうなものもあるものであります。是は先程申上げた通りに、マホメットは無學文盲であり、本は勿論讀むことが出来ないのであるから、是等の總ての點を書物に依つて彼が會得したと云ふことはどうしても言はれないので、それなら人から聞いたかと云へばさうでもないらしい。是が先程申上げた通りに、本當に靈感に依つて神の聲を聞いたに違ひないと謂はれる所以であります。そこでキリスト教に於けるが如く、他を排斥すると云ふことは全然ないので、唯一の神を信する者でありさへすれば、他の宗教でも構はない、キリスト教を決してマホメット教は排斥して居りませぬ。ユダヤ教も排斥して居りませぬ。唯偶像の禮拜だけは斷乎として之を排斥し、唯一の神を信すると云ふ點に歸着して居るのであります。唯、他の宗教と雖も、唯一の神を信するものならば敢て之を排斥すると云ふ態度は執らなかつたのであります。又コーランの中にも、宗教は之を強うべきものでない、強いて信仰しろと云つたのではそれはいけないのだ、自然に信仰するやうに導かなければいけない、斯う云ふことも言つて居

るのでありますから、今の偶像教である限りは斷乎として排撃致しますが、他の宗教は之を排撃すると云ふことはしなかつたのであります。然るにキリスト教は回教に對して非常な反感を抱いて、常に回教を排撃して居りますが、其の根本の理由はキリスト教に於ける三位一體説、即ちキリストは神の子であると云ふ點を回教としてはどうしても承認が出来ないので之を排撃する。之に對してキリスト教徒が不満を感じて回教を排撃するのであらうと思はれるのであります。回教に於ては神は萬物を造るものではあるが、自らは子を産んだり色々なことはしない。處がキリスト教に於てはキリストは人間でありながら神の子であるとされて居る、此の點が回教と全然一致しないので、キリストが神の子であると云ふことを回教が排撃する點がキリスト教の不滿を買つた所以であらうと思ふのであります。其の外に色々な原因もありませうが、兎に角回教自身はキリスト教を排撃して居ないに拘らず。キリスト教は回教を仇のやうにして之と常に争つて居ると云ふ状態が現在迄續いて居るやうな状態であります。

それから今の信仰の教義の外に、實踐義務に關する五箇條の條項があります。それは日本語で言ひましたら勤行とでも言ひますか、唯一神アラを信仰すると云ふことを告白すること、それから禮拜を

すること、喜捨をすること、それから斷食をすること、巡禮をすること、此の五つの實踐義務があるのであります。アラを唯一の神として信仰すると云ふことを告白しなければいけません。それから禮拜祈禱と申しまするか、禮拜を必ずやらなければならぬ。是が一日に五回、朝と晝と日没前と日没後と、それから夜一遍、是で五遍になります。五遍の禮拜祈禱を必ず一日にやらなければいけない。處が此の五遍の禮拜と云ふことが、旅行したり或は何かの都合で出来なければ仕方がないのであるが、必ず之をやらなければならぬと云ふ風なことになつて居つて、彼等回教徒は實際能く之をやつて居ります。それで仕事をやつて居つても其の時間が來れば直にメッカの方に向いて、十分とか十五分とかやるのであります。自動車で旅行して居つても其の時間が來れば自動車を止めて禮拜をやること云ふやうな習慣でありますから、將來我々が新附の民として回教徒に對する場合に、彼等の此の習慣を無視するやうなことがあると、彼等の感情を害するやうなことがあらうと思ふのであります。此の點は或る程度迄、一日に五回でなくて、朝と晝と晩とか何とか云ふやうな工合にすることも或は出来るのではないかと思ひますが、之を止めさせると云ふやうなことをしてはならないやうに思ふのであります。

それから第三の喜捨でありますが、収入の十分の一を喜捨すると云ふことが大體規定されて居るのであります。是は結局富んだ者が貧しい者を助けてやると云ふ意味に於て、一種の社會政策的の意味が盛り込まれて居るやうに思ふのであります。それから斷食であります。此の斷食は九月一杯やるのであります。一月斷食をやると云ふのはむづかしいのではないかと直ぐ思はれますが、全く其の通りでありまして、一箇月の間日中は何も食べないと云ふことであります。夜は軽いものを攝つても宜しい、さうして回教徒自身は之を實行して居ります。非常に窮屈なものになると唾を飲み込んでもいけない、胃の腑の中へは晝間の間は何も入れてはいけないと云ふことになつて居るらしい、水も飲んではいけない、そこで此の斷食が氣候の宜い時ならば兎に角、夏にでも斷食の月が廻つて來た時には非常な苦痛なものらしい、併しそれを彼等は實行して居るらしいのであります。一度斷食の月が済めば、今度は飲めや歌への非常なお祭騒ぎを三日間ばかり續けてやるやうになつて居るやうであります。此の斷食は何の必要があつてさう云ふことをやるやうにしたかと云ふと、斷食に依つて人間の肉體並に精神的の穢れを全部拂つてしまふ、さうして身心共に清淨無垢なものに立返つて行くと云ふ爲の行とされて居るやうであります。

それから次に巡禮であります。巡禮はメッカへ行くことであります。是が人間は一生に少くも一度はメッカへ巡禮しろと云ふことになつて居るのであります。是は交通の關係、又費用の關係で誰もが出来るものではありませんが、回教徒は兎に角どうかして旅費を溜めて、一生に一遍でも宜いからメッカへ巡禮したいと云ふので非常な努力を續けて居るやうであります。東印度から多い年には五萬人位の巡禮がメッカへ行つたことがあるらしいのであります。彼等は一年は愚か數年の間掛つて此の旅費を溜めて、さうしてメッカへ行つてメッカの本殿に禮拜を捧げると云ふことが唯一の望みであるが如く見える場合もあります。又此の巡禮たるや頗る難行苦行を重ねるもので、或る場合にはあのアラビヤの砂漠の中で死んでしまふことが随分あるらしいのです。併し巡禮に行つて噎れると云ふことは是れ天國へ行く所以である、神に歸一する所以であるとして、彼等は喜んで死んで行くと云ふやうな状態であると謂はれて居ります。又巡禮を一遍やれば「ハジ」と云ふ稱號を受けて、彼等は教徒の間に非常な尊敬を贏ち得るのであります。命を掛けても之をやらうと云ふ所に熱烈なる宗教心が窺はれるのであります。それで禮拜をする前に體を清める、是はむづかしい作法がありますが、口を漱いだり頭から手足をすつかり洗ふと云ふやうな、儀式と申しますか、一つの作法があり

まするが、是は丁度日本の神道に於て神社へ参拜する前に必ず口を漱ぎ、手を洗ふ事をやると云ふのに非常に能く似て居るのでありまして、日本へ来た回教徒が、神社の前に於ける日本人の口を漱いだり手を洗つたりする状況を見て、日本の神道と彼等の宗教と一脈相通するものがあるのではないかと云ふやうなことを漏らしたこともあるのであります。

教義や何かに就ては此の位に致しまして、今問題になつて居る大東亞共榮圏の南方地域方面にどう云ふやうな工合にして回教が傳はつて来たか、又現在の状態はどうかと云ふことに就て一言申上げて見たいと思ふのであります。東印度地方はずつとの昔はオーストラリア人、ポリネシア人、メラネシア人、印度ネシア人などが住んで居つた所で、彼等はまあ一言にして言へば海洋民族とも言ふべきもので、最後に印度ネシア人があの地方に勢力を得、西はセイロンからずつと飛んでマダカスカル方面に迄勢力を及ぼして居つた時代があります。其の時代に既に印度ネシア人は獨特の一種の文明を持つて居つたのであります。それで是が或る點に於て日本の神代の文化と似通つたと云ふか、或は同じものであつたやうに思はれる點もあります。又是が日本から行つたのであるか、或は向ふから日本へ来たものであるかと云ふことに就ても相當議論があり、又研究して見なければはつきりしない

點ではありまするが、兎に角スマトラ地方へ行つて見た人の話に、あの地方に於ける傳説が日本の神代に於ける神話に能く似たものが相當あり、又向ふの圓い形をした山に關して、恰もそれが日本の神代に於ける傳説の傳はつた靈山であるが如くに思はれるやうなものも存在して居ると云ふことであり、又バタビヤの博物館にある或る民族移動に關する地圖を見ますと、明かにあのジャバの方面へ移つて行つた民族が、初め日本から向ふへ行つて、それから又日本へ歸つて来たこと云ふ風に説明された民族移動に關する地圖があるさうであります。それや是やを考へて見ますと、日本民族の先祖は南から来たものであるとのみ決め込んでしまはずに、先祖は此方にあるのだ、我々があの地方に於ける文化の開祖であつて、向ふから日本人が移つて来たものでないと云ふ風に見ることが、殊に此の際に於ては必要であるやうに思はれるのは、若し其の説明が立つと致しますれば、今後の南方經營の上に餘程宜い影響を及ぼすのではないかと思ふのであります。現在に於ても南に於て三亞運動と云ふものがあつて、それは「アジアの樂土日本」、「アジアの光日本」、「アジアの指導者日本」と云ふことで、彼等原住民の間に一種の思想運動が起つて居ると謂はれて居る際に、彼等の先祖が我々日本人であると云ふことが證明されたらば、將來の南洋地方の統治の上に非常に宜い影響を及ぼすと思ふのであり

ます。で斯う云ふやうに古い時代から印度ネシヤに或る種の文化が既に打樹てられて居つた、其の後へそれでは何が来たかと云へば、北からは支那人が入り込み、又西の方からは初め通商を目的として今のヨーロッパ人が来たのであるが、之に續いてローマの文明が入つて来たと言ふやうな事實もあるのであります。さうして其の後に印度からヒンズー人が澤山に入つて来るやうになつてから、此の昔からある印度ネシヤの文明とヒンズー文明とが混合しまして、茲に新しき文化が生れたのであります。そこで西暦十二世紀頃になりまして回教がアラビヤから東の方へ移つて来て、ベルシヤを経て印度へ回教が及ぶに及びまして、印度のボンベイの北の方面が其の當時の海上交通の一つの衝に當つて居りましたが、そこ迄回教文明が入つて来て、それが此の貿易路の後を傳つて東へ東へとやつて来て、遂にマラッカ海峡に達したのであります。マラッカ海峡其のものは印度洋と太平洋を繋ぐ道筋でもあり、又アジア大陸と南洋諸島とを繋ぐ橋でもあつたのであります。殊にマラッカが商人の活躍の根據地となつたのであります。回教が先づマラッカ地方及スマトラの北の方へ傳播して來まして、茲に一種の海峡植民地見たやうなものがマラッカを中心として出來たのであります。其の當時ジャバに於きましては、此のマラッカ繁榮を羨やみまして、何とかしてマラッカの商賣を自分の方の手に入

れようと云ふ企みをしたのであります。是がなか／＼うまく行かない。そこで海岸地方の酋長達は或は海岸の都市と云ひますか、海岸の部落に於ては一そのこと回教を自分達も信仰して、さうして回教徒との貿易の利益を擧げるやうに自分達もしようぢやないかと云ふやうなことを考へて、ジャバの沿海地方の土民が回教の方へポツ／＼入つて来る。それが段々大きくなつて、遂に其の當時殆ど全部のジャバを統治して居つたパジャマヒット王家が勢力を失つて奥の方へ追ひやられるやうになつて來た。さう云ふやうな状態で段々に回教と云ふものがジャバ、スマトラへ廣められたのであります。是迄信仰されて居つたヒンズー教が何故易々と回教に移つたかと云ふ點を考へますと印度の密教の影響を受けた回教がジャバ地方へ傳へられた當時に於ては、ジャバの大部分の住民は其の密教的な部分を見て、此の回教と云ふものは或はヒンズー教の、即ち自分達が今迄信仰して居つた宗教の一派ではないかと考へたやうであります。そこで割合に易々とジャバ地方へ回教が廣められたと云ふ結果になつたと謂はれて居ります。

そこで回教があゝの地方に廣められた結果としてそれではどうかと申上げますれば、是は大した變化はなかつたやうであります。唯ヒンズー教に於て認められて居る階級制度、詰り印度に於て現在でも

行はれて居る階級制度でありますが、一番上がブラーマン、其の次がクシャトリア、其の次はオイッシャ、其の次はスードラ、此のスードラと云ふのが一番下の階級で、是が下層の大衆を占めて居るのであります。此の階級制度が回教の侵入に依つて打破されたのであります。詰り回教に於ては、苟くも回教を信する以上は上下の區別なし、階級の差別はない、總て是れ同胞である、兄弟であると云ふ建前でありますから、ヒンズー教の階級制度が打破されるのは勿論であります。唯残つたのは王族と王家と云ふものと其の臣民と云ふ二つの階級に分れると云ふやうな状態になつたので、是も回教を廣まり易くした一つの理由でもありません。又回教が東印度に齎らされて、社會的に及ぼした影響の最も大なるものであらうと思はれるのであります。其の他ヒンズー教に於ける色々の祭りであるとか云ふやうなものは勿論なくなつてしまつたのであります。宗教的にさう大した影響はなかつたやうであります。

文學、美術の方面に於て、まゝ文學的に回教の文献が入つて來た爲に、或は歌の上に於て、或は詩の上に於て相當の影響を受けたてでありませうが、是も大したことはない、唯悪い影響としては今迄のヒンズー教に於ける宗教美術と云ふものが全然廢れてしまつたと云ふことが、是が悪い影響であら

う。それは何であるかと申しませうれば、回教に於ては美術の點に於て偶像を絶対に排斥すると云ふ結果と致しまして、繪にしても或は模様にしても、人間と云ふやうなもの、或は動物と云ふやうなものを繪にする、或は圖案化すると云ふことは全然禁止されて居ります。そこで今迄あつた或は壁畫であるとか、其の他の美術的のものが、回教が入つてからは全然行はれなくなると云ふやうな點から致しまして、寺院とか或は昔の靈廟になつて居つた、又靈廟、寺院に依つて傳へられた美術と云ふものが全然なくなつてしまつたと云ふことが悪い影響の一つであらうと思はれます。さうしてそれならば回教的の建築美術が發達したかと云へば是がなか／＼發達しない、今迄の集會所に當てられたやうな建物が模様替されて、それが禮拜場の代理を勤めると云ふやうなことで長い間やつて來て、現在に於て僅かにアラビア式の禮拜堂があら此方に少しは出來たと云ふやうな點で、而も此のアラビア式の禮拜堂と云ふものは壁畫其の他の點に於ては全然見るべきものがないのでありますから、さう云ふ意味の美術と云ふものが非常に衰へたと云ふことが一つの回教から受けた悪い影響ではないかと思はれるのであります。

それから「オランダ」が「ジャバ」の「パタビヤ」に現はれたのが西暦千六百一年であります。

それ以來イギリスとの間に取られたり又取戻したり色々する歴史はありますが、兎に角千六百年から大體今日に至る迄東印度はオランダが之を支配したと一口に言つて宜いと思ふのであります。そこでオランダは此の東印度に對してどう云ふ政策を採つたか、殊に宗教に對してどう云ふ政策を採つたかと申しますと、他のヨーロッパ諸國が能くやるやうに之をキリスト教化しようとは決してオランダはしなかつたのであります。宗教に關する限り全然従來通り、回教を抑壓もしなければ、又他の一方にキリスト教を廣めると云ふ手段も取らなかつたのであるから、宗教に對しては無政策と云つて宜いのであります。是が又オランダが原住民の反對を蒙らずして今日に至つた所以であるかとも思ふのであります。兎に角人心の把握をやるには、殊に餘り開けて居ない原住民に對しては彼等の宗教傳統と云ふものを尊重してやると云ふことが彼等の人心を把握する所以であると考へるのであります。此の點に於てはオランダのやつた政策には學ぶべきものがあるやうに思はれるのであります。

唯我々がオランダのやつたことで反對しなければならぬ點は、教育と云ふことに全然手を觸れなかつたこととあります。詰り原住民をして無智の状態に置いて、唯オランダ人の言ふが儘に働いて、さうしてオランダ政府の要求する物資を供給する道具として原住民を酷使したと云ふ點が、我々から見

てオランダの今迄の政策に反對しなければならぬ重大な點と思ふのであります。成るほど二十世紀に入つてからオランダ政府も追々と目覺めて來る印度ネシヤ人の要求に應へまして、或る種の政治的權利を原住民に認め、又教育も或る程度迄之を施して來たのであります。大體に於てオランダ政府は印度ネシヤ人を無智の状態に於て彼等の酷使する儘に易々として働くと思ふ住民たらしめむとしたやうでありまして、此の點は將來我々が彼等に對する時に於て反省しなければならぬ點だと思ふのであります。唯オランダ政府がスマトラ、ジャバに於て擧げた功績の一つとしては、經濟的と申しまするか、或は生産的の方面と致しまするか、相當の金を使つて色々の研究をして、是等の地方に於ける生産を大いに盛んならしめたと云ふ點が、オランダ政府のやつたことの中で最も見るべきものであらうと思ふのであります。例へば現在問題にされて居るゴムの如きも、是は初めからスマトラ、ジャバで盛んに生産されたのではなくて、アメリカから特種の苗を輸入して、それから栽培を始めた結果として今日の盛況を齎したのであります。其の外之に類した生産部門に於けるオランダ人の研究と云ふものは、是は我々が敬意を拂つてやるべきものであらうと考へるのであります。今日の御話は大體此の位にして置きたいと思ひます。

昭和十七年六月二十日 印刷
昭和十七年六月廿五日 發行

【非賣品】
【以印刷代謄寫】

東京市麹町區日比谷公園東京市政會館內

編輯兼發行人 關 口 一 郎

東京市芝區西久保巴町七十番地

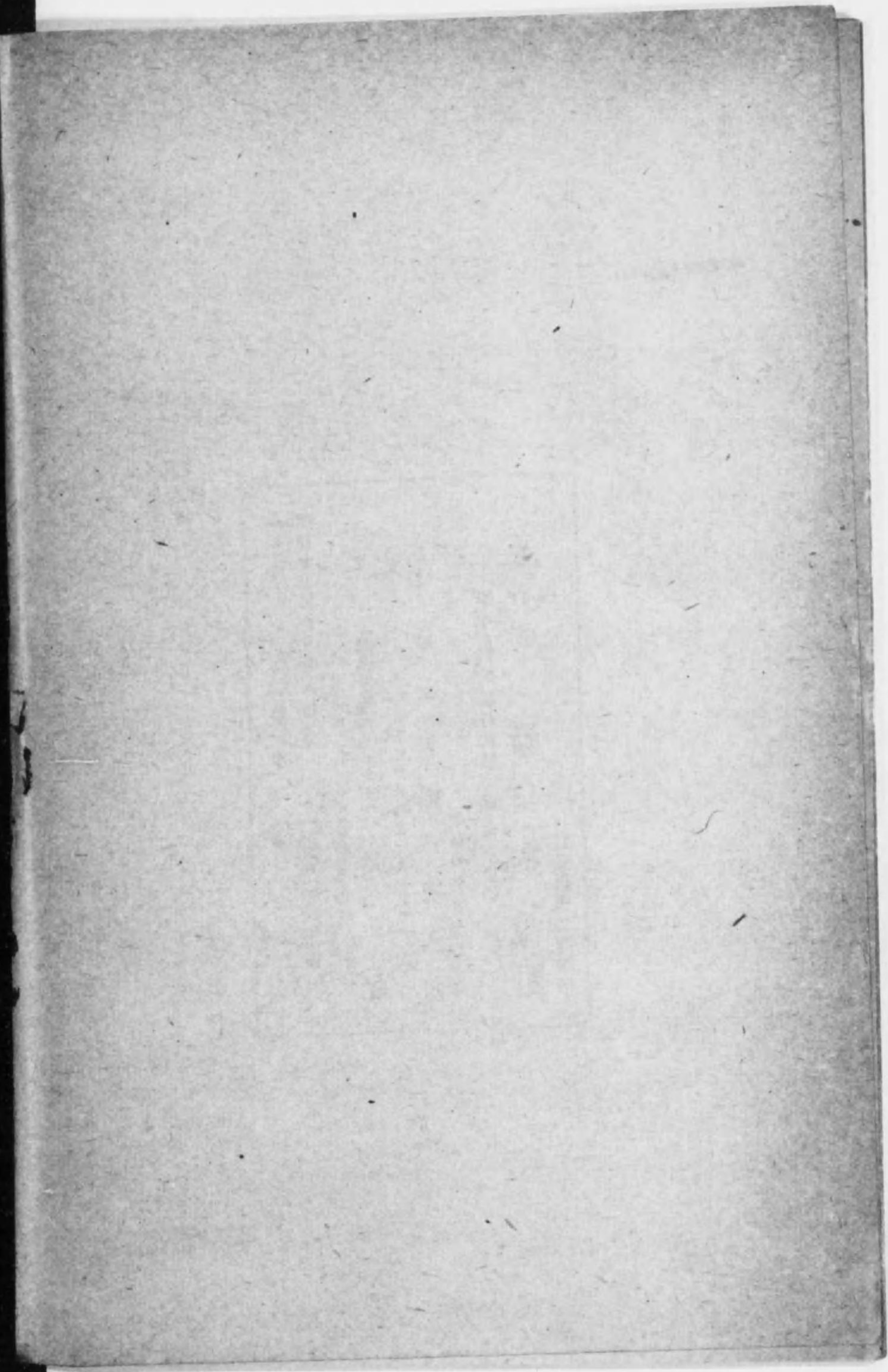
印刷人 福井安久太

會員番號東一二一八

東京市麹町區日比谷公園・東京市政會館內

發行所 新日本同盟

電話銀座二四五番



終